

くすり博物館だより

VOL. 48

平成14年(2002)10月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館
〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1
Tel:058689-2101 Fax:058689-2197
http://www.eisai.co.jp/museum/

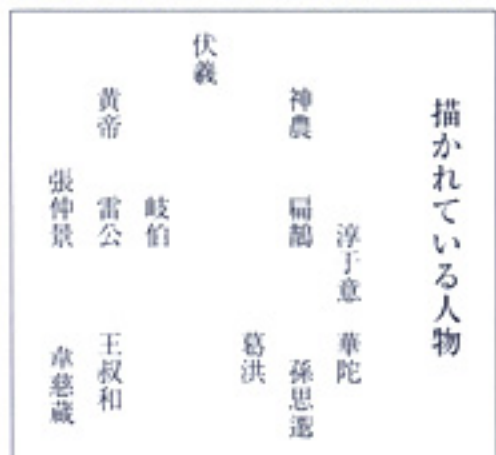
企画展 ^{はり}鍼のひびき ^{きゅう}灸のぬくもり —癒しの歴史— 2002年4月27日～11月24日

テーマ特集◆^{しんきゅう}鍼灸書の流れ

鍼灸を考え出したひとびと



▲漢歴代医聖神像
橋昌元(春賢)画 江戸時代(101.5×44.3)



伝説の中の創始者

古代中国の人々は、病を癒す技術を持つ医師のことを「工」や「医工」と呼んでたたえました。そして諸々の技術と同じように、医薬の技術のルーツを太古の聖王が始めたものと考えていました。各種の説話にも、薬学(=本草)は神農が、医学(=鍼灸)は黄帝が創り上げたと書かれています。

その一方で、実在した無名の医師たちの活躍も、「扁鵲」という一人の人物の功績として説話にまとめられ、後世に伝えられてきました。さらに、張仲景・華陀・孫思邈のように実在した医師たちも、医学の発展に寄与したとみなされると、一種の文化的英雄として神格化される現象も見られました。

このように伝説と実話が混在するものの、中国では医薬に関する過去の経験を、ある人物の功績として医書・本草書に書き残してきました。このため医学・薬学は中国文化の中でより権威あるものと見なされるようになりました。

- 伏義=神話上の帝王で、神農・黄帝とともに三皇とされています。易の八卦や書契をつくりました。
- 神農=神話上の帝王で、薬の神様として、医療や薬業に携わる人々の信仰を受けました。
- 黄帝=神話上の帝王で、国の乱を静めたため、人の病を治す医師たちに崇拝されました。家臣を集めて、鍼灸医学の経典を編集しました。
- 扁鵲=鍼治療の始祖といわれています。
- 岐伯=黄帝的臣下。黄帝と問答を交わした内容を記録した書物「黄帝内経素問」があります。
- 雷公=岐伯とともに、黄帝的臣下として「黄帝内経素問」に携わりました。
- 淳于意=陽慶に師事して医学を学びました。最古の臨床記録(カルテ)を残した名医です。
- 張仲景=「傷寒雑病論」を著し、漢方薬の基礎となる理論や診断術をまとめました。
- 華陀=麻酔薬による外科手術を行った後漢末～魏初代の名医です。
- 孫思邈=高度な医術を身につけた神仙家として名高く、人命の重さは千金の貴さがあるという考えに由来して、民間経験医学をまとめた「千金方」を編纂しました。
- 葛洪=道教医学の祖となった神仙家。神仙術の「抱朴子」、「神仙伝」の著者。各種の薬の処方についても記載しました。
- 王叔和=3世紀頃活躍。診断と治療の両面から鍼灸の発展に寄与しました。
- 章慈藏=不詳。

鍼灸の禁忌

漢方薬と違って、皮膚を切る鍼と温熱を用いる灸は、皮膚に治療のあとが残ります。近代的な衛生観念が確立する以前は、そこから感染症を起こしたり体調不良の一因となったりと、医原病にかかるケースが今より多かったものと推測されます。そうした失敗の蓄積から、鍼灸を施す際の禁忌(タブー)が設けられていきました。

禁忌は、①道教(体内に宿る神々)や暦法(干支)に基づくもの、②体調や症状に応じたもの、③鍼灸に不適切なツボを定めたもの、に大別されます。あらゆる方面の禁忌を熟知して、医師たちはより安全な鍼灸を施すことに努めました。

▶「黄帝蝦蟇經」(「衛生集篇」第一集) 臨模影写旧鈔本

「黄帝蝦蟇經」は、黄帝の名を冠した鍼灸の文献ですが、治療書ではなく、天文・暦法・道教(体に宿る神々)に基づいて灸の禁忌をまとめた書物です。日食の太陽には3本足の鳥、月には右にガマガエル、中央に月桂樹、左にウサギが描かれ、月の満ち欠けによって、灸をしてはいけないツボを決めているのが特徴です。



〈 〉内は資料のサイズ。単位はcm。

古代の鍼灸

診察と治療

脈診と腹診

中国医学の特徴は、①気の流れる経絡を発見したこと、②血の流れる様子から気の状態を察知する脈診を開発したことにあります。診断法は、視る(望)、聴く・嗅ぐ(聞)、問う(問)、触る(切)の4つからなり、これを四診といいます。第4番目の切診は主に脈診を指しました。脈診の熟達は名医の必須条件とされました。

実際には、医師は両手のひとさし指・なか指・くすり指で、患者の両手首に拍動する動脈を軽く触り、病気が軽いか重いか、浅いか深いか、寒いか熱いか……などを診断します。一見、神業のように思われますが、中国哲学で精密に理論化された天人相関説・陰陽五行説によるものです。

一方、腹診は、江戸時代に発達した日本独自の診断法です。中国では「腹を診る」、つまり諸々の症状の1つとして「診腹」しているに過ぎませんでしたが、日本では「腹で診る」、すなわち腹部の診察から病状を見抜く段階にまで発展しました。



人間も動物も

鍼灸はこどもから老人まで、幅広く施されてきました。人間同様、家畜にも鍼灸が応用されました。馬や牛は、戦力・機動力、あるいは労働力として大切にされたので、病気やケガのときにも十分に手当がなされました。日本では馬の需要の高まった戦国時代に馬医の流派が数多く現われ、多くの秘伝書が著されました。

馬の治療では、瀉血がよく行われ、それに用いられる馬鍼は武具の一種として携帯されたそうです。戦国時代には、鷹狩に用いる鷹のツボを鷹匠が発見し、治療と養生のための灸が施されました。近年では犬や猫などのペットの治療にも応用されています。

▼牛の経絡 「牛科撮要」より 天明5年(1785) 写本
獣医学書に経絡や治療方法が書かれています。



▼馬の経絡 「万病三寄集」より



脈診図(他人)

「因註脈訣弁真」より 明・張世賢 清末期刊
自分の脈を診る方法も描かれています。このほかにも、脈の状態を15種類に分類して七表八裏図(左下図)に表し、診断の目安にした書物もありました。



▲「鏡王氏秘伝叔和因註釈義脈訣評林捷徑統宗」巻之1より 明・王文潔 万曆27年(1599)刊



覆手圧按法 并 拊循法 (腹診の図)

「腹証奇覽異」より 和久田叔虎 享和元年(1801)刊
「覆手にて圧按するもの。心胸腹内の静脈を候ふべし。」など、実際のやり方が書かれています。

江戸時代の刺絡治療の様子

「鳴谷齋医弁解」より 高鳴朴口授・和久田叔虎筆録 享和2年(1802)序 写本
中国では古くから瀉血療法を行っていましたが、経絡説が整ってからは刺絡と呼ばれるようになりました。日本にオランダ医学が伝わると、西洋でも瀉血が行われていたことから、一種のブームになりました。



▲針師と患者 「人倫調蒙図彙」より 元禄3年(1690)
人々の仕事・職業を紹介した図鑑にも鍼による治療の様子が描かれています。



▲やしなひ草 脇坂義宣著 下河辺拾水画 天保9年(1838) 写本
こどもに灸を施す様子が描かれています。



ムシ退治

鍼灸の流派にもいろいろあり、禅宗の僧医を源とする流派と中国の医家に端を発する流派があります。後者には吉田流と匹地流が挙げられます。吉田流は、永禄元年(1558)に明に渡って鍼術を学んだ出雲大社の神官・吉田意休を開祖とします。

この吉田流には、体内に巣くうさまざまな「ムシ」を鍼で退治する方法がありました。「ムシ」には、実際に胃腸などに宿る寄生虫だけでなく、かつては原因不明だった精神疾患(狐憑き・疳の虫など)や腹部の積聚(しゃくじゅ：胃癌や子宮筋腫を含む)も含まれました。刺鍼技術は中国の直伝でありながら、日本に古くから伝わる「ムシ」と呼ばれる病を治療したところに、吉田流の特徴があります。

▲「[蟲書] 針口伝書」 写本 1帖

「蟲書」は別名「鍼口伝書」といい、氣・血・虫という独自の病因論を提唱しています

おわりに——

町でもよく鍼灸の治療院を見かけますが、最近ではツボ体操をするなど家庭でも鍼灸やその背景にあるツボの考え方に接する機会が増えてきたように思われます。興味を持たれた方は、鍼灸の歴史をひもといてみても面白いかもしれません。その歴史からは、実に多くの人々の経験と研究の積み重ねの上に、現在の治療があることがわかりいただけることでしょう。

薬草園から

よく似た名前の薬草茶

ちょっと縁起のよさそうな名前エビスグサ。マメ科の植物で、地方によっては六角草・茶豆ともいわれています。生薬名は決明子といいます。決明は、目の周りのただれや赤く痛むときに用いると目がすっきりしてよく見えるようになるという意味です。一方、最近ではあまり見かけなくなったカワラケツメイは、全草をお茶代わりに飲用し、弘法茶・浜茶・豆茶といわれます。エビスグサもカワラケツメイもどちらも利尿に用いられます。ハブソウは熱帯アジア原産で、利尿や強壮に用います。生薬名を望江南といいます。

ところが、エビスグサの薬草茶も、同じ科のハブソウの薬草茶も同じ名前「ハブ茶」と呼ばれています。市販の「ハブ茶」にはエビスグサがよく使われているといわれますが、本来はハブソウの種子を使ったものをハブ茶といいます。また、カワラケツメイの名前も「河原に生えるケツメイ(決明)」に由来しますので、エビスグサの生薬名とよく似ています。したがって、この3種類はよく混同されることが多いようです。

健康維持のために飲む薬草茶ですので、種類を間違えずに根気よく飲むとよいでしょう。ただし、体質に合わないと感じたらすぐ止めることも肝心です。(右の絵は上から順にエビスグサ・カワラケツメイ・ハブソウ)

薬用植物園 荻谷辰行



薬用植物園の思い出——定年を迎えて

薬用植物園の担当になったのは今からちょうど25年前の10月。インドネシア・ジャワ島にあるエーザイ株の薬草試験農園からの転勤でした。日本の薬草について全く知識のない自分にとって、薬草を覚えることが最初の仕事で、早朝に出勤して園内を歩き回るのが年末頃まで続きました。

川島町は木曾川の中洲であり、園内も砂質の土壌でした。現在のような芝生もほとんどなく、冬になると砂ぼこりが舞いました。夏、薬草類が成長しかけた頃、今度は日照り続きで、毎日午後には長いホースを引きずっての水まき作業が待っていました。そこで早速砂地改善のため、落ち葉を集めて動物の糞を混ぜ、堆肥を作り、これを播種・移植・植え替え時に何度も施し続けました。数年後自動散水設備も導入でき、植物も順調に育つようになりました。

その後取り組んだのが植物の説明板の改善でした。それまでの説明板は、植物名、科名、用部、生薬名、薬効を並べただけのシンプルなもの。新しい説明板は名前や生薬名の由来・特徴などを60字前後の一口メモとして付け加えました。最初は一日で1~2枚の原稿しか作れず、作り終えるのに1年以上をかかりました。当時は大変でしたが、今にして思うと、来園者の方に植物への理解を深めてもらうための説明板作りが、逆に自分の勉強になっていました。現在ではパソコンで制作していますが、当時は手書きで、風雨にさらされると文字が薄れることもあり、何度も看板屋さんに書き直してもらいました。新しい説明板が設置されると、この説明をメモしている方が多かったので、この一口メモを「薬用植物に親しむためのハンドブック」としてまとめたところ、大変好評でした。

1993年には逸見誠三郎薬用植物園長(当時)が薬草説明会を開催しました。その年は月2回開催し、その1回は私が担当しました。終了後参加者から「薬草の作り方を勉強したい」との強い希望が出されたので、翌94年4月から「薬草友の会」として1年コースの教室を開始しました。参加者は37名で、全員が説明会の参加者でした。この薬草友の会の栽培教室が終了間近になったころ、「来年も継続して参加したい」という方が多かったので、薬草園での活動を継続する方を「薬草友の会」とし、この1年コースを「薬草栽培教室」に名称変更して現在に至っています。薬草友の会初代会長・水谷昭二さん、友の会顧問・大塚利一さんには会の基盤を作っていただきました。二代目会長・坪井辰美さんの頃には会員が増えたため、2つのグループに分かれ、これを三代目で現会長の三輪実義さんが引き継がれました。その後活動が多様化し、4つのグループに分かれましたが、会員の皆さんは花壇の世話をはじめ、薬草園フェスタや夏休み親子教室でのボランティア活動など大活躍いただいています。私は今秋で定年を迎えましたが、今までの仕事の中で薬草友の会の皆さんと一緒に活動できたことが一番楽しく、実り多き体験でした。

末筆となりましたが、全国の植物園関係者の皆さまには、種苗交換や問い合わせなどひとかたならぬお世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともくすり博物館の薬用植物園をよろしく願いいたします。

白井英夫



よろしくお願ひします



◆新館長が就任しました

三宅康夫前館長の退任に伴い、平成14年7月1日付けで篠田愛信館長が就任しました。

「博物館着任直前まで、エーザイ株式の医薬品研究開発部門に在籍し、すさまじい進展を続ける先端技術と世界レベルでの新薬開発競争の対応に腐心してきました。一転して“くすりの歴史と文化”を世に伝えることを任務とする博物館活動には、とまどいがありました。今、「照古鑒今(古えを照らし、今を観る)」の重要性を実感しております。くすり博物館は“古えから学ぶ場”であり、一般の方にくすりを理解していただく場でもあります。博物館職員一同、皆さんに“場”を提供することに全力を尽くします。」

新収蔵資料を紹介します

◆為朝の武威・痘鬼神を退くの図 (35×24) 芳年画 明治23(1890年)

源為朝は平安時代末の弓術に優れた武将で、疱瘡絵によく登場します。これは歴史上の英雄である為朝が疱瘡神を退治したため、その後八丈島では疱瘡は流行らなかったという伝説に基づくものです。絵には疱瘡神を送り出すために行事で使われる棧俵と、為朝を恐れて逃げ出そうとしている疱瘡神が描かれています。



◆世界早廻飛行教育双六 (55×78.5)

昭和6年に完成した国際飛行場・羽田空港を振り出しに、モスクワ、パリ、ベルリン、ローマ、ハルビンなど世界各国の都市が書かれ、飛行機の駒で世界飛行するという双六です。図中には「君が代」「バブロン錠」「タラコン湯」「タコの吸出し」「スマイル」などのくすりの名前が載っています。製作元は不明ですが、旅には薬が付きものなので、薬屋さんの販促品だったのではないのでしょうか。



◆講演会が行われました

5月12日には影山むつみ先生(アトリエファブル代表)によるハーブの講演会が開催されました。海外での豊富な体験から、アロマテラピーをはじめとする各種ハーブの利用方法をご紹介いただきました。参加者は200名で、どの方も熱心にメモを取られていました。



6月23日には今年度企画展の監修をしていただいた長野仁先生が、鍼灸の歴史とツボ健康法について講演されました。漢字の話から鍼灸や身体の仕組みについて解説。特にツボ健康法については、体調を整えるための3つの方法を教えていただき、参加者の皆さんも熱心に覚えていました。参加者は122名でした。



◆今年も夏休み親子教室

7月27・28日には夏休み親子教室が開催され、恒例の薬草リース・ポマダー作りが行われました。今年はお父さんと息子、おばあちゃんと孫など多彩な組み合わせでの参加が多く、それぞれ相談したり協力しあって、楽しく制作していました。



◆矢数医史学賞を受賞

当館が30周年記念に出版した「大同薬室文庫蔵書目録 附 館蔵 和漢古典籍目録」[薬物名出典総索引～江戸・明治初期の薬物検索のための～]の2冊が、第十四回矢数医史学賞を受賞しました。これは漢方の大家・矢数道明先生より寄贈された基金を基に、医史学研究の優れた業績に対して年に1件授与される賞で、当館の図書館活動と顧問・青木允夫の地道な調査研究が認められました。



◆資料の貸し出しがありました

7月20日～9月2日まで亀山市歴史博物館で開催された企画展「秘法薬・龍心湯—亀山の薬の歴史を調べよう—」へ紙看板・薬研等の資料を貸し出しました。扇形製丸器の体験コーナーはこどもでにぎわっていました。なお、8月17日には当館学芸員・稲垣裕美が「病と健康の年中行事」について講演しました。

◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

池畑尚 市川次郎 浦田耕作
大谷芳郎 片桐榎龍堂 加藤栄治
河野亨 参天製薬株 日本新薬株
中島路可 松木明知 宮川村

～ありがとうございました～
(敬称略/五十音順)

内藤記念くすり博物館

開館/9:00～16:00
休館/月曜日
年末年始(12/28～1/8)

館長 篠田愛信
学芸員 稲垣裕美(編集担当)
学芸員・司書
野尻佳与子・伊藤恭子
庶務 森田麻起子
小島敦子(見学受付)
林 知子(図書整理)
薬用植物園
苅谷辰行 栗本裕康(栽培管理)
顧問 青木允夫
アドバイザー 逸見誠三郎